

中国語の環

第122号

『中国語の環』編集室編 2023年1月

- 目次
- 9 巻頭エッセイ マイクロラーニングって？
 - 10 中国語でどういう？ 酸っぱい
 - 11 例文で説き(=解き)ほぐす中国語文法
Lesson 6 疑問文の「疑問」を解く(第3回)
 - 12 語彙学習の話 基本語彙の選定について
 - 13 紛々らしい文法表現 “没…”と“没…了”
 - 15 看图学谚语 絵で見ることわざ(12)
 - 17 中国語と文化 中国語の歌詞のアクセントとメロディーの関係
 - 18 中国語の文法は面白い わたしの代わりに李君に電話をしてもらえませんか
 - 19 読者の広場 4級に合格！

ひとことエッセイ

吉川英治さんの『新書太閤記』の冒頭に近い箇所、旧時の中国の農村を描いた小説などで時折り目にする“鸡公车”についてこんな記述があります。

車輪の大きな手押し車である。野や山坂のきらいなく押し通る小型の荷車だから、わざと歯の心棒には油を注さない。車輪が廻るにつれて、キイキイと牝鶏が啼くような軋みをたてるので鶏公車という名があった。

さすがは吉川さん、簡にして要を得ていると言いたいところであるが、びっくりさせられるような誤認があります。お気づきでしょうか、「キイキイと牝鶏が啼くような軋みをたてるので鶏公車と…」。“鸡公”は牝鶏（めんどり）ではありません。“公鸡”と同じで雄鶏（おんどり）です。“公”は動物の雄（おす）を意味する語で、反対の雌（めす）は“母”です。一部の方言では修飾語の“公”や“母”が被修飾語の後ろに来て“公鸡”“母鸡”が“鸡公”“鸡母”となります。“鸡公”を「牝鶏」と解された吉川さんの情報源を知りたいところです。

(上野 恵司)

発行 一般財団法人日本中国語検定協会

本誌掲載の記事、写真、イラスト等を無断で複製・
複写・転載することを禁じます。

マイクロラーニングって？

趙 秀敏（東北大学）

マイクロラーニング（Microlearning）という言葉をお聞きになったことがありますか？マイクロラーニングとは、一般には5分程度の学習コンテンツをスマートフォンなどのモバイルデバイスで学習を行う学習方法を指します。つまり、隙間時間を活用し、随時随所に学習ができる効果的な学習方法で、近年では大学教育や企業研修などに積極的に取り入れられるようになっていきます。ちなみに、マイクロラーニングは中国語で“微型学习”（wēixíng xuéxí）といいます。

このスキマ時間を活用した学びは、別に現代に特有なものではありません。紀元前戦国時代の儒家荀子は、すでに「跣歩を積まざれば、以って千里に至るなく、小流を積まざれば、以って江海を成すなし」とミニ学習の積み重ねの重要性を説いています。また、唐宋八大家の一人で、数多くの名篇を残した欧陽脩は、『帰田録』の中で「余の平生作る所の文章は、多く三上に在り、乃ち馬上、枕上、廁上なり」と記し、文章の構想を練るのに場所を選ばなかったことを述べています。

しかし、なぜ近年になって、マイクロラーニングは、新たな概念として提起され、普及し始めたのでしょうか。その社会的背景には、情報通信技術の進展、特にスマートフォンの普及に伴って、いつでもどこにいても動画やアプリで手軽に学習を行える環境が整備されたことがあります。従来の学習方法に対して、マイクロラーニングは、通勤通学、昼休み、コーヒープレイク、就寝前などの隙間時間を利用し、気軽に繰り返し取り組むことで、学習内容を定着させることができるため、学習効果の向上、学習意欲の維持、学習の習慣化が期待できます。さらに、マイクロラーニングでは、学習コンテンツに動画やクイズなどゲーミフィケーションを応用したものが多く、楽しい学習体験が得られます。

こうしたマイクロラーニングは、現代人の多忙を極めるライフスタイルに適合しており、また語学学習、特に発音学習や単語学習、リスニング、リーディングなどとの親和性が高いと言えます。学習者は、短時間で高い集中力を持って、継続的に高頻度の学習を進めることができるため、言語の定着や習得に繋がります。

現在、マイクロラーニングに活用できる中国語の学習ツールは様々あり、ネットで簡単に検索することができます。例えば、発音、単語、リスニング、会話など目的別の学習アプリをはじめとして、便利な辞書アプリや翻訳アプリ（Google, 百度）、楽しい動画共有サイト〔YouTubeやYouku（优酷）〕、中国語学習者向けのPodcastチャンネルなどをあげることができます。これらを利用していつでもどこでも楽しい中国語学習ができます。

さあ、みなさんも今日から、マイクロラーニングで中国語学習を始めてみてはいかがでしょうか。

酸っぱい

張 勤（中京大学）

どの言語にも一つの語でさまざまな場面や状況が描けるいわゆる万能語がある。「うまい」はそのような語で、飲み物や食べ物から歌声や話術までいずれも「うまい」と言えてまさに万能だ。中国語にも万能語が多くあるが、そのうち“酸”という語はレパートリーが広く、しかもその発想は日本語と大きく異なる。

“酸”は何よりもまず基本的な味覚とされる“酸（酸っぱい）・甜（甘い）・苦（苦い）・辣（辛い）・咸（塩辛い）”の一つを表すのに用いられる。

(1)这个橘子真酸！（このオレンジは酸っぱい！）

(2)肉放时间久了，酸了，不能吃了。（肉は長く置いたので、酸っぱくなり、もう食べられません。）

秋に漬け、自然発酵させた後、冬季に鍋料理などに使う白菜を“酸菜”と言い、ヨーグルトを“酸奶”と言うのも(2)の用例と同じ発想の使い方だが、口にすることができる食品だ。

味覚としての「酸っぱい」から派生して日常生活の辛さも“酸”で表現する。

(3)人生的甜酸苦辣他可都尝过了。（人生の甘みも苦みも彼は皆味わってきた。）

(3)のような日常生活の辛さの意味合いから、更に肉体的な辛さも表すようになるが、この場合はなかなか日本語に訳するのが難しい。

(4)跑了一天，累得他腰酸背痛。（一日駆け回り、彼は疲れて足腰が痛くなった。）

(5)经常手酸手麻，可能身体在发“警报”。（よく手に疲れた感じや痺れがあれば、体からSOSを出している可能性がある。）

(6)低头伏案久了，我只觉得脖子酸软，但我不敢停笔，怕来不及。（ずっと頭を下げて机に向かっていたので、首が疲れて力が入らないと感じてしょうがないが、間に合わないと心配し、筆をやめられなかった。）

(7)合同上密密麻麻的英文小字，看得我眼睛都酸了。（契約書は英語の小さな文字がびっしりと書かれており、読んでいて目も疲れてしまった。）

“酸”は痛感よりも「疲れる」という疲労感だ。このような疲労感は日本語ではよく「痛い」と表現するため、(4)～(7)の“酸”はよく「痛い」とも訳される。疲労感の“酸”が精神的な状態の描写に応用されると“心酸”“鼻酸”となる。

(8)想到女儿明天就要结婚离开家时，老李的那种心酸、心痛、不舍的情感定然是难以言表的。（明日にでも娘が結婚して家を出ていくと思うと、李さんの辛い、悲しい、また別れたくない気持ちは言いようのないものであったろう。）

(9)看到这既温馨又凄恻的一幕，在场的人都无不为之鼻酸。（この暖かくて哀れな光景を見て、その場ににいる人はみな悲しくて鼻がじんとした。）

“酸”のレパートリーはまだまだ続くが、どれも要注意の表現だ。

Lesson 6 疑問文の「疑問」を解く（第3回）

古川 裕（大阪大学）

ここまで「疑問＝疑い＋問い」という公式に基づいて、疑問文には「疑い」文と「問いかけ」文という2種類の表現があり、両者は異なるメカニズムでできていること、「問いかけ」文は“吗”との相性が良いのに対して、「疑い」文は“吗”との相性が悪い代わりに“呢”との相性が良いことを見てきました。

第3回は、「問いかけ」文と「疑い」文は、文の内部でも違いがあることを見てみましょう。常用される副詞の代表として、“也”（…も）を使うことができるかどうかを見ると一目瞭然、「問いかけ」文と“也”は仲が良く一緒に使えるのに対して、「疑い」文と“也”の相性はとても悪いことがわかります。

「問いかけ」文	(1)他是大学生吗？	→他也是大学生吗？
「疑い」文	(2)他是不是大学生呢？	→×他也是不是大学生呢？
	(3)他是大学生还是中学生呢？	→×他也是大学生还是中学生呢？
	(4)他是什么人呢？	→×他是什么人？

一方で、“到底”や“究竟”のように「問いかけ」文とは相性が悪く、「疑い」文とは相性が良い副詞もあります。「結局、つまるところ、いったい」とつき詰めるようなニュアンスを表す副詞は「疑い」文と仲が良いのです。

「問いかけ」文	(1)他是大学生吗？	→×他到底是大学生吗？
「疑い」文	(2)他是不是大学生呢？	→他到底是不是大学生呢？
	彼は結局大学生なの、大学生ではないの？	
	(3)他是大学生还是中学生呢？	→他到底是大学生还是中学生呢？
	彼はつまるところ大学生なの、それとも中高生なの？	
	(4)他是什么人呢？	→他到底是什么人？
彼はいったい何者なの？		

更に最も大きな違いは、「問いかけ」文は常に独立していて他の文の中には入れないが、「疑い」文は他の文の中に入っていけるという点です。

「問いかけ」文	(1)他是大学生吗？	→×我不知道他是大学生吗。
「疑い」文	(2)他是不是大学生？	→我不知道他是不是大学生。
	彼が大学生なのか大学生ではないのか、私は知らない。	
	(3)他是大学生还是中学生？	→我想知道他是大学生还是中学生。
	彼が大学生なのか中高生なか、私は知りたい。	
	(4)他是什么人？	→不管他是什么人，我都欢迎。
彼が何者であっても、私は歓迎する。		

これだけたくさん証拠をあげれば、中国語の「疑問」文を「問いかけ」文と「疑い」文に分けることに賛成してもらえそうです。

基本語彙の選定について

沈 国威（関西大学）

理想的な基本語彙表には、十分な表現性（言いたいことが一応言える）と発展性（さらに上達する）が備わるべきである。では、どのように語を選定するのか。これまでは頻度調査と専門家による調整が基本であるが、これでは限界がある。

すべての語は同類と同義という2つのグループに分けられる。いわゆる同類語は、“麻雀、鸽子、乌鸦、老鹰、鸵鸟、企鹅……”のように人間が科学的あるいは文化的に同類の概念と考えた語群である。個々の概念は同じレベルにあるので、同位語とも呼べる。同類語群は、共通の上位語を持つのが一般的である。上記の例では“鳥”が共通の上位語になる。麻雀などを「種名」といい、鳥を「類名」ということにしよう。荀子の言うように類名の上にさらに類名があり、最終的には極めて抽象的な「物」に辿り着く。各レベルの類名は、基本語彙の最も強力な候補であろう。特に今日では家具、武器、食品、材料……などの人為類は益々増え、その類名は表現上において極めて重要である。では、種名はどうか。種名をすべて基本語彙に指定できないのは自明であるが、種名の中に例えば、鳥と言え、麻雀のように類名に特に近いものがある。認知言語学では、麻雀を鳥のプロトタイプ（典型）という。プロトタイプは、文化地理的な環境で決まる。例えば“肉（類）”は類名、“猪肉、牛肉、鸡肉、羊肉”などが種名になるが、肉と言え、中国ではまず猪肉が連想される。種名の中にあるプロトタイプは基本語彙のリストに加えられるべきである。

次に同義語を見てみよう。“妻子、爱人、老婆”のような名詞は言うまでもないが、動詞・形容詞においても同義語の存在が広く観察できる。“妻子vs拙荆”から分かるように同義語群の中に他の語と比べたら意味的によりニュートラルで、使用頻度も高いものが存在する。このようなものは当該同義語群のプロトタイプであって、筆者は「代表語」と呼ぶ。代表語は同じ意味を持つ他の語を解釈したり、言い換えたりすることができるので、語彙習得において非常に重要である。当然、基本語彙に加えなければならないと考える。

なお中国語の同義語群に、“船—船舶”；“学—学习”；“好—优秀”のように1字語と2字語が同義表現となる現象が多く見られる。筆者はこの現象を「単双相通」と呼ぶ。これは中国語の現代性を反映するものである。その2字語の多くは20世紀に入ってから活発化したもので、東アジアでは共有している。

上記から分かるように基本語彙は、同類語グループから類名とそのプロトタイプ；同義語グループはそのプロトタイプが選ばれるべきである。なお中国語に即して言えば、「単双相通」に配慮する必要がある。このように選ばれた語が、3000～4000語の間に落ち着くのは、人間の脳の限界から来る結果と思われる。詳細は『中国語学習シソーラス』と拙著『語彙力の獲得』（関西大学出版部近刊）を参照されたい。

“没…”と“没…了”

魯 曉琨 (文京学院大学)

前2回は文末の“了”と“V了”について述べました。学習者は“了”を習った同時に“了”構文を否定するとき、“没”または“没有”を用いることも教わったはずですが(以下“没”と“没有”は“没”のみ表示する)。また、“没”を用いると、“了”も消えるということが注意されたでしょう。例えば、

- (1)你昨天买书了吗? (あなたはきのう本を買いましたか。)
 我昨天没买书。 (わたしははきのう本を買いませんでした。)
 (2)他考上大学了吗?? (彼は大学に受かりましたか。)
 他没考上大学。 (彼は大学に受かりませんでした。)
 (3)你买了三张电影票吗?
 (あなたは映画の切符を3枚買いましたか。)
 我没买三张, 只买了两张。
 (わたしは3枚は買わなかったが, 2枚だけ買いました。)

このように“没”と“了”は一つの文の中で同居してはならないということを感じた後、もう少し勉強が進むと、(4)~(6)のような“没”と“了”が共起する用例に出会うはずですが。

- (4)他一个月没打工了。(彼は一か月アルバイトをしていません。)
 (5)小张两年没回国了。(張さんは2年間国に帰っていません。)
 (6)我很长时间没有读书了。(わたしは長い間本を読んでいません。)

今回は文末の“了”はどういう場合に“没”と共起できないか、どういう場合に“没”と共起できるか、またそれをどう理解すればよいのか、ということを明らかにしたいと思います。

前回同、文末の“了”を「過去のことを表す」「了a」と「事態の変化を表す」「了b」に二分類しました。この分類にもとづき、“了”が“没”と共起できるかどうか説明することができます。

(1)(2)では“了”は“了a”であり、過去のことを表します。この“了a”を否定するには、“没”のみを用います。つまり、“了a”は“没”と共起できません。

反対に(4)~(6)では“了”は“了b”であり、「事態の変化を表す」。この“了b”は“没”と共起できます。なぜ、こう言えるのでしょうか。

“了”が“没”と共起できる条件から話を進めていきます。

(4)~(6)を観察すると、“没”の前に時間表現があることに気付いたでしょう。それは確かですが、しかし“没”の前に時間表現がある(7)(8)では、“了”は“没”と共起できません。

- (7)*昨天没见到张老师了。(きのう張先生を見かけませんでした。)

(8)*上星期没看电影了。(先週は映画を観ませんでした)

例(7)(8)では“没”の前にある“昨天”“上星期”は時点を表す時間表現なので、文末に“了”を用いてはなりません。一方、(4)~(6)では“没”の前にある“一天”“两年”“很长时间”はいずれも時間の長さを表す時間表現なので、文末に“了”を用いることができます。要するに、“了”が“没”と共起できる条件は“没”の前に時量表現がある場合のみです。

“没”と“了”が共起できる構文は「主語+時量+“没”+VP+“了”」なので、時量を伴い、“了”を用いると言えます。実はこの構文は時量を伴い、“了”を用いる肯定文と同様に理解することができます。

比べてみましょう。

(9)我学了两年汉语了。(私は中国語を2年間勉強しています。)

(10)我两年没学汉语了。(私は中国語を2年間勉強していません。)

(9)では“学汉语”は話す時間まで継続していて、学習した時間はゼロから2年間になったとの変化を言っています。(10)では“没学汉语”は話す時間まで継続していて、学習しなかった時間はゼロから2年間になったとの変化を言っています。

「V+時量+“了”」では“了”は「事態の変化を表す」“了_b”です。この場合では“了_b”はゼロから過ぎた時間量までの動作の時間量の変化を表します。これに対し、「時量+“没”+VP+“了”」でも“了”は「事態の変化を表す」“了_b”です。この場合では“了_b”はゼロから過ぎた時間量までの動作停止の時間量の変化を表します。

また、意味構成からみると、(9)(10)とも二つの命題が含まれています。

(11)我学汉语。两年了。

(12)我没学汉语。两年了。

この二つの命題が一文に組み合わせられたとき、肯定形においては、時量“两年”が動詞の後に置かれ、補語となりますが、否定形においては、時量“两年”が“没”+Vの前に置かれ、状況語となります。

ここまで読んだかぎりでは、“没”の前に時量表現があれば、文末にかならず“了”を用いると理解しかねませんが、実はそうでもありません。“了”が“没”と共起できるのは動作停止の時間が話す時間まで継続している場合のみです。動作停止の時間が話す時間の前である場合は“了”を用いることができません。例えば、

(13)参加工作以后我两年没有学习汉语。

(就職した後、わたしは2年間中国語を勉強しませんでした。)

(14)上小学时，我三年没在日本。

(小学校時代、わたしは3年間日本にいませんでした。)

(13)の“我”は就職した後2年間中国語を勉強しなかったが、話すとき、勉強しています。(14)の“我”は小学校時代3年間日本にいなかったが、話すとき、日本にいます。とにかく過去のことを否定するとき、“没”のみを用います。

絵で見ることわざ(12)

絵 張 恢

文 『中国語の環』編集室



贪多嚼不烂

tān duō jiǎobulàn

欲張って食べ過ぎても消化しきれない。欲深くたくさん取り込んでもこなしきれない。何もかも学ぼうとしても身に付かない。



螳螂捕蝉，黄雀在后

tángláng bǔ chán, huángquè zài hòu

蝉を捕えようとする螳螂（カマキリ）の後ろに黄雀（スズメの一種）が迫っている。目前の利に心を奪われて危険が迫っていることに気づかぬたとえ。



天下没有不散的筵席

tiānxià méiyǒu bù sǎn de yánxí

果てない宴（うたげ）はない；盛んなことはいつまでも続くものではない。驕（おご）れる者久しからず。“天下无不散之宴席”とも。



贪小便宜吃大亏

tān xiǎo piányi chī dà kuī

小利に欲を出して大損する；小さなことにこだわりすぎて大切なことをしくじる。一文惜しみの百知らず。一文惜しみの百失い。



桃李不言，下自成蹊

táo lǐ bù yán, xià zì chéng xī

桃李言わざれども，下自（おの）ずから蹊（みち）を成す；徳のある人の所には，みずから求めなくても自然に人が集まってくるものだ。



天下乌鸦一般黑

tiānxià wūyā yībān hēi

世の中のカラスはみな黒い；悪いやつはどこでも同じように悪い。悪人や反動派に対して幻想を抱いてはいけないという戒め。



天下无难事，只怕有心人

tiānxià wú nán shì, zhǐ pà yǒuxīn rén

世の中にはできない事は存在しない、ただやる気があるかどうかにかかっている。決心さえすれば何事も成し遂げることができる。



兔子不吃窝边草

tùzi bù chī wōbiān cǎo

兎（うさぎ）は巢のそばの草を食べない；盗賊も地元では悪事を働かない。すぐばれるようなことはしない。“兎子”は“兎儿”とも。



万丈高楼从地起

wànzhàng gāolóu cóng dì qǐ

万丈の高楼も地面から立つ；何事も基礎が肝心である。大きな事業も小さい所から一步一步進めなければ成就しない。“从地起”は“平地起”とも。



天有不测风云

tiān yǒu bùcè fēngyún

天には不測の風雲が起こる；禍（わざわい）は予期せぬ時にやってくる。一寸先は闇（やみ）。よく“人有旦夕祸福”と続けて使われる。



陀螺不抽不转

tuóluó bù chōu bù zhuàn

独楽（こま）は叩（たた）かなければ回らない；自覚の足りない者に対しては厳しく励まさなければならない。“陀螺”は独楽の一種、叩いて回す。



乌云遮不住太阳

wūyún zhēbuzhù tàiyang

黒雲も日光を遮ることはできない；真理はいつまでも覆い隠すことはできない。悪事は必ず露見するものである。

中国語の歌詞のアクセントとメロディーの関係

加藤 徹（明治大学）

「中国人は歌を耳で聴くだけでは歌詞の内容を理解できない」という有名な都市伝説がある。いわく。中国語には四声がある。例えば同じmaiという発音でも、第3声のmǎiなら“买”（買う）だが、第4声のmàiなら“卖”（売る）だ。しかし、maiを歌のメロディーに載せて歌うと、四声の区別がなくなる。買うのか、売るのか、区別できない。だから字幕や歌詞カードがないと、ネイティブ（母語話者）も歌を聴くだけでは意味が理解できないはずだーという理屈である。

とんでもない迷信である。たしかに、会話のときは四声は重要だ。が、中国人は「これは歌だ」と思った瞬間、意識が切り替わる。歌詞の前後の文脈とか、歌の雰囲気から、意味内容を自然に判断する。もし仮に歌の中に「♪きみの美しい(yanjing)」というような言葉がでてきたら？ ラブソングなら“眼睛”(yǎnjing) だろう。だが、メガネ屋さんのCMソングなら“眼镜”(yǎnjing) だろう。

そもそも日本語にだってアクセントはある。ズボンやスカートの内側にはく下着は「パンツ」（高低低）だが、ズボンは「パンツ」（低高高。平板アクセント）だ。日本人も中国人も、古い歌とか、早口の歌は、耳で聞くだけでは理解できない箇所もあるだろう。それでも、基本的には耳で聞くだけで、歌の内容は理解できる。

とはいえ、単語本来のアクセントを気にする音楽家は、昔からいた。作曲家の山田耕筰（1886-1965）は、「夕焼け小焼けの赤とんぼ」云々の歌詞に、単語のアクセントにあわせたメロディーをつけた。「赤とんぼ」という単語のアクセントは、今は「低高高低低」だが、昔は「高低低高高」だった。山田は「ラドローレーミー」とアクセントに寄り添ったメロディーをつけた。

このように、単語本来のアクセントに沿って歌のメロディーを作るというコンセプトを、中国音楽の専門用語で“依字行腔”(yī zì xíng qiāng) という。歌詞の漢字一字一字のアクセントに依拠して、ふしまわし“腔”のメロディーを微調整する、という意味だ。京劇や詩吟などがそうだ。

反対に、メロディーが先にあって、あとから歌詞の漢字一字一字をジグソーパズルのピースのように埋め込む、というコンセプトを“依腔行字”という。外国の歌曲に自国語の訳詞で歌う場合はこちらだ。現代の歌は、歌詞の一番と二番で単語が違って、同じメロディーで歌うのがふつうだ。つまり現代人の歌は中国でもアクセント度外視の“依腔行字”ばかりである。

ただし中国でも詩吟は例外で、漢詩のアクセント“平仄”(píngzè)の妙味を賞玩する“依字行腔”のコンセプトが今も健在である。これについては、杉本紀幸先生のサイト「日中2か国語詩吟／中日雙語吟誦」<http://fukuijin.net/>に、YouTubeの動画つきの解説があるので、ご覧ください。

わたしの代わりに李君に電話をしてもらえませんか

王 志英（沖縄大学）

中国人は数量に敏感で、スーパーで買い物をする際に卵までも量り売りするほどである。中国語の一部の動詞は結果まで含意しないため、それを補う手段として、動詞の後の補助成分が非常に発達している。話し手が相手に指示を出す時、動作・行為に関する結果あるいは明確な数量まで言わないと、依頼する内容が不明になる。動詞の重ね型も一種の数量補語として「不定量」を表す。

中国語では、

(1)* 你等。

という言い方はしないが、

(2)你等	{	a	一下(一会儿)。	——少 量
		b	10分钟。	——定 量
		c	等。	——不定量

のように、数量補語があれば、自然な表現になる。

動詞の重ね型が表している「不定量」は「量」的に多いか少ないかは、重ね型自体ではなく、修飾語や文脈に依存する。相手に依頼をする時、(2)のcのように意図的に動詞の重ね型で相手に要求する「量」を曖昧にし、どこまでやってもらうかは相手に委ね、相手にかける負担を少なくし、依頼行為を成功に導く戦略（戦略）として挙げられる。

一回きりで完結する動作を相手に依頼する場合、動詞の重ね型は使えず、数量表現が必要である。

(3)* a 请帮我给小李打打电话。

* b 请帮我给小李打电话。

c 请帮我给小李打(一)个电话。

レストランでビールを注文する時も、

(4)* 请来啤酒。

请来三瓶啤酒。

のように具体的な数量を伝えないといけない。

事物の存在・出現あるいは消失などを説明するのに用いる存現文の場合も名詞の前に数量表現が必要である。

木の下に犬がいます。

日本語なら「犬」の前に数量詞がなくても平気であるが、中国語はないと落ち着きがない。

(5)* 树下有狗。

树下有一只狗。

4 級に合格！

埼玉県立和光国際高等学校 2 年 吉田拓斗

私は高校 1 年生の時から中国語の勉強を始め、勉強を始めてから 1 年になりました。中国語を学ぼうと思った理由は、英語以上に母語とする人が多く、海外に行ったときもより多くの人とコミュニケーションがとれると思ったからです。

授業は週に 2 時間で、日程によっては授業が無くなる週もあり、中国語検定の勉強は学校の授業だけでは足りません。過去問を解いているときに習っていない単語、見たことがない単語が多くありました。そのため補習にも参加し、過去問を解いたときに出てきた単語を覚えました。

試験では、できそうな問題は絶対に点を落とさないように気をつけました。ライティングではやはり知らない表現を書く必要がありましたが、書ける所は書いた結果、半分は点をとることができたと思います。学習を始めてから 1 年足らずなので受かるか不安でしたが、自分の番号を確認したときはうれしかったです。

検定に合格するためには過去問をたくさん解くことが大切だと思います。過去問を解くことによって検定試験の内容を把握して準備ができ、単語や文法も学べる、まさに一石二鳥です。

4 級に合格しただけでは、いろいろな中国語を読んだり聞き取ったりするにはまだまだ不十分なので、次は 3 級合格を目指していきたいと思います。



2022年10月8日(土)に中検スピーチコンテストを開催しました。

暗唱	最優秀賞	入柿 梨紗子さん (京都産業大学)
	優秀賞	川崎 理恵さん (神田外語大学)
スピーチ	最優秀賞	鈴木 夢彩さん (愛知教育大学附属岡崎中学校)
	優秀賞	今野 さくらさん (会社員)
	審査員特別賞	手呂内 毅さん (法務省)
通訳	最優秀賞	周 静さん (日本創智株式会社)
	優秀賞	山田 理絵子さん (会社員)



出場者の皆さまと
記念撮影